

野菜主要害虫の発生の特徴と対応

施設栽培ではハダニ類、コナジラミ類などの微小害虫の発生が多く、特定の微小害虫が媒介するウイルス病が増加傾向にある。露地栽培ではヤガ類などの鱗翅目害虫の被害が多い。化学合成農薬以外の対策として、ネット被覆や黄色灯などの物理的防除、天敵利用などの生物的防除が有効である。

内 容

野菜の施設栽培では、施設内の乾燥と冬季でも温度が安定することから、ハダニ類（写真1）をはじめ、コナジラミ類などの微小害虫の発生が目立っている。近年、微小害虫が媒介するウイルス病が増加傾向にあり、中でもタバココナジラミ（写真2）が媒介するトマト黄化葉巻病（表紙写真）が目立っている。一方、遮蔽物がない露地栽培では、ヤガ類など大型の害虫による被害が多い。

施設栽培では、サイドや入口のネット被覆など物理的防除に取り組みやすい。また、放飼した天敵がよく定着することから、カブリダニ等の天敵農薬が利用されている。微小害虫が媒介するウイルス病に対しては、防虫ネットによる侵入阻止等の媒介虫の防除に加え、罹病株の抜取り等、有効な対策を組み合わせる必要がある。露地栽培では、ヤガ類の防除に黄色灯などが一部の産地で導入され、実績を上げている。また、市販されている天敵農薬は施設栽培でしか使用がで

きないことから、近年、土着天敵を保護・増殖して利用する研究が増えており、県内における技術導入について検討が必要と思われる。

微小害虫やコナガ等を中心に、化学合成殺虫剤の効果が低下する事例が近年増えている。対策として、害虫の世代を考慮した新たなローテーション散布の考え方（ブロック式ローテーション）が提案されており、害虫の薬剤抵抗性の発達抑制に有効と考える。

今後の方針

現在、施設イチゴにおいて、紫外線（UVB）照射と光反射資材を組み合わせ、うどんこ病に加え、ハダニ類も同時に防除できる新しい物理的防除の開発に取り組んでいる。化学合成殺虫剤を大幅に削減できることから、環境にやさしく、かつ薬剤抵抗性を発達させない技術として早期確立を目指している。

田中 雅也（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）



写真1 ナミハダニ



写真2 タバココナジラミ